

緑友会コミュニケーション誌

FRIENDS OF GREEN

フレンズ オブ グリーン

1997年3月発行

No. 93

青森県青森市平新田森越17-1
発行人 長尾 良宣 青森県印刷青年経営者会議
編集人 茨城印刷緑友会



第30回 全国印刷緑友会 神戸復興支援セミナー

 全国印刷緑友会

第30回 全国印刷緑友会 神戸復興支援セミナー開催

と き 2月8日(土)
ところ 神戸市産業振興センター

第30回全国印刷緑友会神戸復興支援セミナーが2月8日、神戸市産業振興センターで「今、とらえよう21世紀の姿マルチメディア未来都市神戸」をテーマに開催され全国から255人が参加した。今回のセミナーでは、二年前の阪神大震災で親を失った18才以下の震災遺児の中の高校生を支援する「くすのき基金」に剰余金を寄付、開講式の中で長尾会長より財団法人神戸新聞厚生事業団理事長の池口善英氏に目録が贈呈された。

休憩をはさんで第一講「震災復興とマルチメディアの活用 - KIMEC 構想の展開 - 」と題し神戸市震災復興本部総括局復興計画推進室室長の木村義秀氏が講演。途中、神戸大学大学院教授の田中克己氏をパネラーにしてテレビ会議が行われた。

第二講はアドビシステムズ(株)の田中和宏氏が「印刷とインターネットがもっと仲良くなるために」と題し講演を行った。

(尚、講演については後に掲載します。)

その後、懇親会は、場所を神戸ハーバーランドニューオータニに移し盛大に行われた。



神戸復興支援セミナーを終えて

大阪青年印刷人クラブ

松 口 正



神戸復興支援セミナー開催にあたりましては全国各地より多数の皆様のご出席を賜わり無事成功裏に終了する事が出来ました。これも縁友全ての友情の賜と大阪青年印刷人クラブ・神戸印刷若人会メンバー同心より感謝し、厚くお礼申し上げます。又今回のセミナーの意義の一つである神戸復興支援の一環として、セミナーの剰余金を“くすのき基金”へご寄付させて頂きました事、合わせて皆様のご理解ご友情に感謝申し上げます。

さて、肝心のセミナーの方はいかがでしたでしょうか、簡単に私の感想を述べさせて頂きますと、“習うより慣れろ”と言う事でした。

どうしても私達は、テレビやラジオ、新聞、雑誌に至るまで、情報は空気や水と同様に、特別な事をしなくても、又特別な意識を持たなくても、言わば、無意識の内に手に入る物と考えて来たと思います。しかしこれからは特別な意識を持って、情報を手に入れなければなりません。アクセスしなければ何も始まらないと。

但し、行政のサービスを考えると、全ての市民に平等に情報のサービスをする必要性があります。早急にインフラ、コミュニティーの整備構築を進め、どうしても閉鎖的になりがちな、これらネットワークの真のオープン化を図る事が必要でしょう。ビジネスの面では教育や老人医療にインターネットが活用されていますが、行政レベルでも子供から老人までが利用出来る環境に早くなればと思います。

又、PDFにより我々印刷業が情報産業の担手として、マルチメディア社会でこれからも生き残れる、生き残る為にもPDFの活用を考える、そんな活路を示唆して頂いた様に思います。

このセミナーが皆様にとって有意義な物であってほしい、そして神戸の復興度合は個人個人で違うと思いますが、復興支援セミナーとさせて頂いたこのセミナーが、単なるイベントで終るのではなく、皆様個人個人の胸の内に、神戸を思う気持ちが、永く続けばと思います。

本当にありがとうございました。

セミナ一風景





お礼のご挨拶

財団法人 神戸新聞厚生事業団
理事長 池口善英

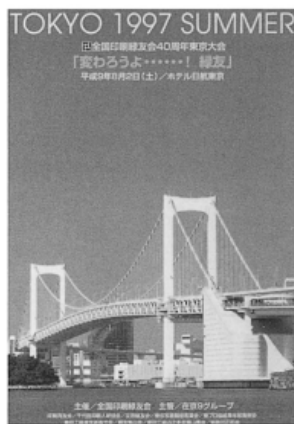
神戸、阪神間および淡路島北部を壊滅状態にしたあの阪神・淡路大震災から早くも二年の月日が経過しました。被害者は深い悲しみの中から立ち上がり、復興へ向けて力強い活動を進めていますが、保護者を失った子供たちの悲しみはいまだに癒えず、寂しい思いをつのらせていることでしょう。民間機関の調査によりますと、18歳未満の児童・生徒たちの中で保護者を亡くした子供は500人近くにものぼる—という数字が出ています。

神戸新聞厚生事業団では、震災直後から、こうした遺児たちの中でも義務教育を終えた高校生を支援する「神戸新聞くすのき基金」を創設、救援活動を実施しています。すでに第一期生（平成7年度）として62人、第二期生（平成8年度）として72人の受給生に対し生活援助資金（奨学金）を支給していますが、このたびは趣旨にご賛同いただき、心温まる励ましのお言葉と浄財を賜り、心より厚くお礼申し上げます。

寄託金はさつそく「くすのき基金」に納め、皆様方の温かいお気持ちとともに生徒たちに届けることに致します。今後ともご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

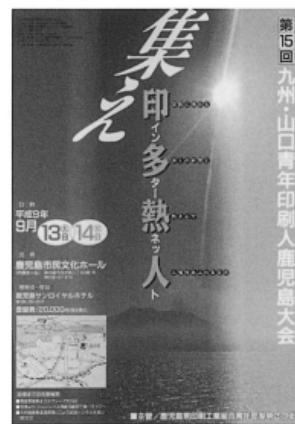
○全国印刷緑友会 40周年東京大会

開催日：平成9年8月2日(土)
会場：ホテル日航東京
登録料：23,000円
主管：在京9グループ



○第15回九州・山口青年印刷人鹿児島大会

開催日：平成9年9月13日(土)・14日(日)
会場：鹿児島市民文化ホール
登録料：20,000円
主管：鹿児島県印刷工業組合青年部黎明さつま



第1講

震災復興とマルチメディアの活用 — KIMEC 構想の展開 —

木村 義秀氏

(神戸市震災復興本部総括局復興計画推進部 マルチメディア推進室室長)



◆プロフィール◆

昭和46年神戸市役所入庁。市民局・経済局・教育委員会事務局を歴任。平成5年から神戸国際マルチメディア文化都市（KIMEC）構想などの業務に従事されています。

神戸市は、他都市に先駆けて、インターネットに取り組んでおり、阪神・淡路大震災では、直後から、神戸市のホームページで、震災情報を発信して世界中の注目を浴びました。

また、震災復興の大きな柱として、情報インフラの整備とマルチメディア都市化を進めており、同氏は、この推進役として活躍されています。

日経新聞を読んでおられる方はご存じだと思いますけれども、1月17日の日経の1面の復興阪神・淡路2周年の所に、トップの所に私の名前が出てまいりまして、神戸市は郵政省と心中をするという、心中の木村と呼ばれております。

最初30分程私がお話させていただきました、その後神戸テクノラボに田中先生がおられますので、そちらの方でテレビ会議で、もっとつっこんだ話ができると思います。

神戸国際マルチメディアアンドエンターテイメントシティという神戸国際マルチメディア文化都市構想という略称、頭をとった部分がKIMECでございます。

実はこれを発表したのが94年の6月でございます。地震がきたのが95年の1月17日でございます。ということは、地震の前に神戸市はマルチメディアを活用した都市作りをやるよと打ち上げたわけです。

これがインターネットというものを、一躍、市民権を得させてしまった。諸悪の根源でございます。1月18日に神戸市の外国語大学のサーバーから出したホームページでございます。ちょっとスクリーンでは見にくいのですが、ここを見ていただいたら分かると思いますが、1995年1月18日、震災が起きましたのは1月17日5時46分でございます。このウェブ上に出しましたのは、オフィシャルな記録でいきますと、1月18日の午前10時でございます。約1日足らずの間に被災地の中からこういう情報が出た。

うちはインターネットでホームページを出していますと

言っても、どれだけのアクセス件数があつて、その中身のログはどうなのか。実は、先程のホームページで体験的に分かったわけです。何かと言うと、神戸市の外国語大学のサーバーは生きてます。AIMアライブということですね。ここがポイントなのです。まさにインターネットが言うところのインタラクティブ性ですね。そこを出しているのです。別に被災地がこんな状況ですということは、ついでに出しましたが。

これは、私どもが言っています電子の貼り紙です。これは震災直後なり、その後神戸に来られた方は、よく記憶されたと思いますが、家の前に貼り紙をはって、〇〇の家族はどこに小学校に避難してますとか。連絡先はここです。そういうものがあつたと思います。あれをデジタル化して、世界に貼りだしたのです。同じことです。

貼り紙か、アナログか、インターネットというものを活用したホームページというデジタルになっただけなのです。根本は変わっていません。

インターネットの意義ですが、一番言いたいのはここです。見る側に主体性がある。アクセスされてなんぼ。神戸市の外国語大学のサーバーは生きてます。被災地の中で生きてますというのが、これがみんなが欲しい、コンテンツです。だから1月20日に、4万6千ものアクセスが来たわけです。

キメック構想ではマルチメディア文化を中心とした次世代の都市作りをめざします。国際都市神戸に相応しいデジ

タルエンターテイメントシティを創造する、それがキメック構想です。

皆さん神戸と言うと、イメージはなんでしょう。たぶん港ですよ。港に関連しまして、そういう部分から出てくる重工。そんな中でいわゆる産業の空洞化、円高、オイルショックなどを経験しました。そういうことの中で、二十数年前に神戸市も、ひとつの造船とか鉄鋼とかに傾く都市ではなく、もっと自分なりの自立が出来る都市を作っていくということ、実はポートアイランドに作りましたが、ファッションですね。特に神戸の場合は、ファッションと言うと、アパレルと言うんですか、生活産業そのものであると。衣食住ということで、お菓子もファッションよ。というようなことでやってきました。それがそういう意味で言いますと、日本のそれなりの企業に育ってきています。バレンタインデーを仕掛けたのも、実は神戸のお菓子屋さんだそう。今をさる二十数年前のことです。そういうことをやってきました。

それともう一つが、皆さんご記憶があると思いますが、1981年、昭和56年に神戸ポートアイランド博覧会を、ポートアイランドでやりました。地方博としては、無類の集客を誇ったという博覧会でございます。

その延長線として、マルチメディア、デジタル技術、それが使えるのではないかと出てきたわけです。だから基本的に言うと、神戸市がやってきました、そういう集客都市作り、コンベンション、ファッション。そういう部分のより強力な道具、ツールとしてマルチメディア、そういうデジタル技術が使えるのと違うか。ということを考えてというのがキメック構想でございます。

キメック構想には、4つの核プロジェクトがございます。ひとつはコンテンツ開発とか人材育成の核になるデジタル映像研究所というものを作ろう。それからネットワークを活用したいろいろなアプリケーションサービス。それからもうひとつが、そういう人材を育てる。またそれによって集客を出来るイベント。そういうものを有機的に連携していくというのが、この構想でございます。

それからキメックワールドという部分ですね。テーマパークやないかとよく言われるのですが、決してテーマパークではございません。そこに新日常と書いてあると思います。テーマパークは非日常なのです。

マルチメディアが当たり前という近未来ですね。それを体験していただく。当然ここではネットワーク技術を活用されたことが行われますので、企業サイドからすると、新しいひとつのマーケティング形式なり、自分の所の事業のひとつの開発、そういうものになる。例えば、ゲームを作っても、まずここでテスト的にやって、次はこう改良しよう、ということが出来る、そういう所にしようというものでございます。

ちなみにこのデジタル映像研究所とキメックワールドは、実はポートアイランドの沖に今造成しております。そのコアもついでこうと考えております。

それともうひとつが、ポートアイランドという部分を、そこに神戸の新たな企業を集めてくる。育てていく。そう

いう所にしようということで、ひとつはインキュベーションの核になる施設整備をしたらいじゃないか。それからもうひとつ、いわゆる規制緩和、税金を安くする、優遇措置をする。こんなことをやってみる、これはなかなか国の制度があつて難しい部分ですが、そんなことを打ち上げました。

それがどう実現されたかというのが、この部分であります。先程申しあげました1月17日の日経新聞一面の囲みの中の私の、郵政省と心中というのがこの部分です。そういうことで、神戸市は復興計画の中で、そういうふうに打ちあげる。それに対応しまして郵政省は、ここに挙げています、次世代の防災通信のネットワークの研究開発を神戸で行う。ということも打ち上げました。これは先程の防災ネットワークと同じものがございます。この中に有線系ネットワーク、これは何かというと、ケーブルテレビを活用してインターネットを使う。

加入とか考えれば、一番家庭に近い。各地のケーブルテレビ事業者さんが、ケーブルテレビでインターネットの実験をやるぞとか事業やるとか言っています。

それと今から神戸大学の田中先生とやり取りをします、情報通信研究開発支援センター、神戸テクノラボと申しております。これは先程の神戸企業ゾーンにインキュベーションの核施設の誘致、その情報通信版と位置付けをしております。

ということで取りあえず私の話は、これで終わらせていただきたいと思います。(拍手)

〔田中〕 今日テレビ会議のテーマでいただいておりますのが、「マルチメディアで社会がどう変わる」、そういうお話ということなんです。

私は、このテーマが若干間違っていると思うのです。マルチメディアで社会がどう変わるのではなくて、我々がマルチメディアで社会をどう変えたいか。そういう視点から議論をお願いしたいと、そういうふうに思います。

もうすでに木村さんが、キメック構想とか通信放送機構の神戸リサーチセンター、神戸マルチメディアテクノラボのお話をされたと思うのです。神戸市内には今日現在では、多分日本の都市の中では、これだけ情報通信インフラが整っている町はないですね。

ところが実際の神戸の市民の皆さん方が、そういうことにどれだけ気づいておられるか。地域情報通信インフラが、地域のコミュニティに上手く結びついているとは、言えない状況なのです。

木村さんは市役所の方ですし、それからこういう情報通信インフラと、地域のいろいろなコミュニティで上手く使っていただくにはどうしたらいいのか。特にキメック構想も含めて、まずご意見をいただきたいと思うのですが。

〔木村〕 これは一つは、どれだけの方がそういう部分にアクセス出来るような手段を考えると、いかにコストをとるのですか、そういう部分を考えていくのか、それともう一つは、それを行政が行政サービス的手段としてど



う考えるのか。これはコストなのか。行政サービスなのか。というそんなあたりの割り振りを、これから作っていく。それをはっきりと、例えばインターネットのホームページを使って市民の方に伝えてご理解をしていただく。そんなことがまず最初ではないかと僕は思うのです。

〔田中〕 はい、おっしゃる通りで、例えば神戸のこういう情報通信のインフラですね。これはお国がよくやっていたのだと思うのですが、残念なのは、設備が入って施設が出来て、実はここまでを仏を作って魂入れずなんです。

むしろそこからが大事で、それをいかに使っていくかという仕組みですね。ソフトウェアとかコンテンツとか、それから実際にそれを使って活動を行う人ですね。そこが上手く動く仕組みを作らないと、なかなか上手くいかないでしょう。

是非とも行政としても頑張ってそういう継続的な活動が出来るといい仕組みを作りたいなと思います。

〔木村〕 今日は印刷関連の方々集まりでございますので、DTPとかWCUがまずお仕事としては一番近いと言われていたと思うのですが、デジタル技術なり情報テクノロジーというのは、あくまでも道具であり、ツールであると思っただけかと思っています。

それを動かしていく人間のシステムというのですか、ご意見があればと思うのですが。

〔田中〕 デスクトップパブリッシングとか、こういうことを私の大学の事務型の人たちは全く知らないのです。DTPとか印刷の電子化、その潜在的なお客さんになる方々は、沢山いるんですけども、最新の技術がちつとも伝わっていないのです。ですからそういう啓蒙がものすごく大事なと思うのです。

じゃあどうすればいいのか。一つは、やはりDTPのコミュニティーとお客さんを結ぶようなネットワーク作りをしないと駄目じゃないかと思うのです。

電子メールでいろいろな話し合いが出来るような、もしくは情報提供が出来るような、そういうことから始めればいわけですね。

もう一つは、これはかなり深刻だと思うのですが、DTPの技術がどんどん進みますと、お客さんが会社に、例え

ばこれを印刷してくださいというふうに頼む仕事がかえって減る可能性もあるわけです。むしろお客さんの所で全部やってしまうと。そういう諸刃の刃なんですよ。

印刷でも、プロのノウハウの情報の提供サービスとかやられたらどうかと思うのですが、木村さんいかがでしょうか。

〔木村〕 それが印刷なのかは別としまして、やはりそれが一番大事なコンテンツと言うんですか、そのアウトプロダクトが、プリントアウトであり、また別の媒体であり、というふうになるんじゃないかとは思うのですけれども。

ただその中で、ここで若干行政というか、地方自治体として、なくなってしまうのをどうするんよという部分を、考えてしまうのです。

どうしてもそういう部分を、いかにブレイクする、激変緩和と言ったら怒られるのですが、なんか出来ないかなあと考えてしまうのです。

〔田中〕 例えば印刷業界の方と顧客、その間のインターネットを使ったネットワークコミュニティーを作るという話は、これは別に業界そのものの脅威になる話ではないのです。ですから打合せもネットワークの中で出来るとかですね。

これまでの印刷技術、それから今新しくDTPとか、どんどん発展している技術、これに各々人が付いていますので、ここが一番本質的で、しかも難しい所だと思うのですよ。

例えばアドビのアクロバットという技術があるんです。これは非常に高品質な印刷物のイメージですね、それがすぐにインターネットでも流せる。

ところがアクロバットと言って、ご存じの方がどれくらいいらっしゃるかなんです。印刷関係の方は、そういうものを上手く利用するという仕組みが大事だと思うのですよ。

DTPでない従来の技術、それを守ろうというふうな守りの姿勢だけだと、日本の農業みたいになってしまいますよね。ですから非常に難しいテーマですけれども、少なくとも今あるいろいろな技術とか、電子ネットワーク、そういうものから着実にスタートされたらどうでしょうか。

〔木村〕 地震の前はマルチメディアというとコンピューター、CD-ROMというスタンドアローンのイメージだったですよ。それが今やネットワークなければただの箱の世界ですよ、インターネットを代表としまして。そのあたりがひとつの新しいポイントかなと。

当然キメック構想もインターネット協議会もそうなんですけど、ネットワークを動かすための情報テクノロジー、その部分をプラスにしていこうと、僕は認識しております。

〔田中〕 キメックワールドの構想は、行政側のひとつのプランですよ。こういうものに市民の声がどれくらい反映出来るかということだと思うのです。実はコンピューターの上で、インターネットでやれば、どんどん意見と

かアイデアをいただいて、修正していけると思うのです。

それからもう一点は、私は個人的には、インテリジェントビルだとかハイテクのピカピカのビルだとか、あまり好きではないのです。むしろハイテクをさりげなく隠したような、品位のある町に、神戸になってもらいたいです。ディズニーランドに行きますとチキハウスという、これが私好きなんですが、ハワイかどっかの古い家を作っているんですけども、実はその中に全部ハイテクが埋め込まれているんです。マルチメディアとかこういうものを使って、21世紀、我々がどんな町を作りたいか、そういうことを議論する場が必要じゃないかと思うのです。

例えばインターネットの上で、バーチャルキメックワールドを作ってみて、そこでいろいろなご意見をいただいて、例えばDTPの関係とか、それをキメックワールドにどう入れるかとか、そういう議論もあると思うのですけれども。

〔木村〕 そうですね。だから僕らはよく言うのですが、バーチャルモールのリアルワールドと言っているのですが、そういうものを考えたいなと思っております。

〔田中〕 やはりこれから地域の電子コミュニティを上手く作っていくということが大事だと思っております。スマートバレージャパンという、日本の電子コミュニティ作りの張本人の通産省の鈴木ヒロシさんがいらっしゃってますので、鈴木さん何か一言どうぞ。

〔鈴木〕 通産省でも電子出版のいろいろな勉強会とかプロジェクトとかやっています。時代の最先端を担ってもらうのが電子出版、出版業界。ただそういう話をすると普通の印刷業界の方は全然違う話だと思うのだけれども、印刷業界の方が今ですでにやっておられる仕事の中でいろいろなリソースを会社として人材として持つておられるのです。それを自分の技は何なのかということをもう一回見つめ直して、それを構築して一番最後のところだけ電子化すればいいのです。

そのコンテンツ作りというのを一番よく分かっているのが印刷業界で、分かっていたきたいのも印刷業界です。

〔木村〕 プロップステーションというのをやっております。そのことに関しまして、ちょっとお話していただいて、そろそろ終わりたいと思いますが。

〔田中〕 これはDTPの分野と非常に関係がありますし、最後に竹中さんにしめくくっていただいて、この討論を終わりたいと。

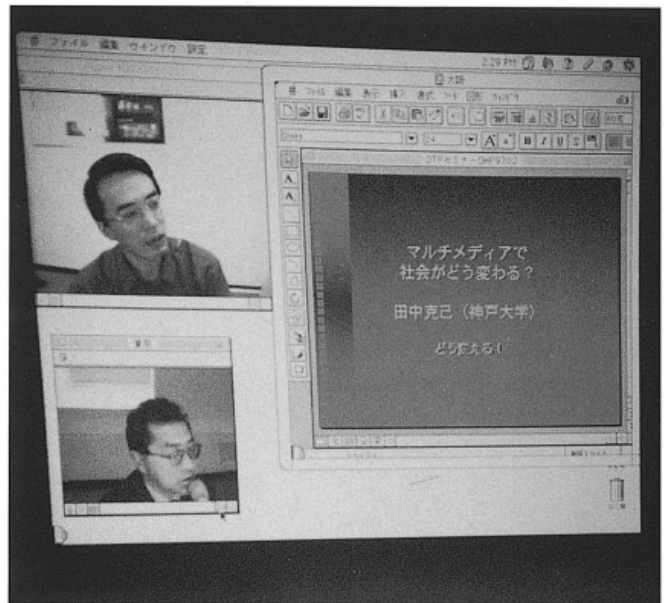
〔木村〕 プロップステーションの竹中さんでございます。

〔竹中〕 沢山の人たちがインターネットやマルチメディアを使うことで、自分が情報の受発信の主体者になると。それで緊急の時に、コンピューターネットワークが役立ったとか言われましたけれども、やはり毎日使っていないものは緊急の時には役立たへんやろうと思うのです。

そういう意味で、ひとりでも沢山の方が、そういう緊急時にも使える道具として、あるいは日常のコミュニケーションの道具として、ひいては仕事、ゼニを稼ぐ道具

としてマルチメディアを使っていけるようにと。

それが今まではどうしても障害を持っている人というのは、二の次、三の次になっていたのですけれども、実はその障害を持っている人にこそ最も役立つ道具だということをこの活動の中で実感していますので、この経験を元に神戸でもインターネットセミナーを広げていきたいと思っております。



〔木村〕 そろそろ時間がきたので終わりたいと思いますが、日本全国から来られていますので、田中先生から最後に一言お願いいたします。

〔田中〕 今のプロップステーションのお話も関係あるのですが、コンピューターとかDTPの技術を身につけておられる方も沢山いらっしゃいます。そういう方々に仕事をつかんでいただこうと。実はコンピューターとかDTPの技術の前では健常者の方も体にハンディキャップを持っていらっしゃる方も関係ないのです。ですからそういう方々とのことも、是非ともDTPのほうで考えてもらいたいなと、これは私からのお願いです。

それからもう一つは、DTPこれが発展しますと、次はマルチメディアコンテンツの製作、蓄積、配付ですね。そういうことに関するいろいろなプロジェクトとか、いろいろなアイデアを今集めつつあるのです。そういう意味でもうしばし神戸のほうをご注目いただけるとありがたいなと。

お願いばかりになりましたが、守りではなくて、新しい技術をどんどん身につけていただいて、それを電子化しますとまたすごい武器になるのではないかと思います。

どうもありがとうございました。

〔木村〕 はい、分かりました。

今日はどうもありがとうございました。

印刷とインターネットが 仲良くなるために

田中 和宏氏
(アドビスシステムズジャパン)



◆プロフィール◆

昭和30年 東京生まれ。

昭和53年 上智大学国際学部卒。

平成元年、アドビスシステムズジャパンに入社し、ポストスクリプト・ソフトウェア及びアプリケーション製品のセールス・マーケティングを担当。

現在は、ポストスクリプト技術全般のマーケティングを担当している。

今の世の中インターネットというキーワードがあると非常に多くの方に集まっていた。そういうことで「インターネットと仲良くなるために」というタイトルになったと思うのですが、具体的にいいますと、デジタル時代の印刷ビジネスということで、私もアドビスシステムの人間でございますので、デジタルの世界で生きております。この中で、皆様方はこれからどういった形で印刷というもののビジネスをしていただければいいのかなというお話をさせていただこうと思っております。

まず最初にアドビの人間として絶対に聞かなくてはならないことなのですが、今日お出でいただいている方々でポストスクリプトの製品をお使いになられている方、ちょっと手を挙げていただけますか。非常に多くの方にお使いいただきましてありがとうございます。

いきなりアドビの使命というお話をさせていただくわけなのですが、だいたい去年、一昨年くらいですか、インターネットというものが世の中に普及する前まではインクをのせて何か表現する技術であるとか、製品、ツールというものを提供するのが我々の使命だったわけです。

それがインターネットというものが世の中に出てくるようになりまして、使命が少し変わりました。対象となるものが、印刷という言葉から情報という言葉に変わりました。我々の使命としては、皆様方が情報を扱われる際の何か手助けになれば、何か製品を出せれば、何か技術を提供出来れば、というふうになってきたわけです。

ここで定義の話になりますが、印刷というのは何か。今の印刷は紙の上に情報をのせる。出版というのは、その紙

になったものを大量のコピーが出来るわけですが、それを流通させるわけ。それが今の世の中だと思うのです。

いきなり今日の私の話の結論にってしまうようなのですが、これからの印刷というのは、ちょっと変わってくると思います。情報の加工は同じなのですが、形態といつたらいいか、書式といつたらいいか分かりませんが、要はどんな情報でも、これから皆さんが扱えるようにならなくては行けない。紙を含めていろいろな媒体というものに加工していかなくては行けない。

今の世の中を見ても、情報の流通の仕方は様々な方法があるわけ。一番目が、やはりテレビから。次がラジオから。紙というのも、静止画と文字、とりあえず平面の所でもものが扱えるわけ。私がこれから皆さんにお勧めしようとしているデジタル、それはほとんどすべての情報の形を扱えるようになってきているわけです。これが素晴らしいところだと思うのです。ですから奥が深くなっていく。

すでにいろいろな形で、電子媒体で出版されているものがあります。

情報の受信者というのは紙で情報を受け取って、読んで理解して自分のためにしていたわけ。それが電子的にきますから、コンピューターの上で読む。それを紙にした場合には、自分のところでプリントするわけです。

だいたい印刷業に携わっている方々は、えーじゃあ我々はどこにいけばいいの。ここで終わってしまうと皆さんがっかりして帰られてしまうのですが、今印刷物の製作というのは、だいたいこういう行程を歩いていると思います。



これはデスクトップパブリッシングでやった場合と違って、ここで見ていただきたいのは、この中で情報の発信者側がどこまでやっているか。印刷ということに限らずに、出版というところで見ていただきたいと思います。出版される方々は、この中でどこまでやられているでしょう。最初に作るころから、あのトラックの絵までやっているのですね。

もちろんその中で皆さんの役割というのがあると思いますが、情報の発信者として見てみると、トラックまでやって、情報を受け取る人のところまでもっていつてあげているわけです。新聞がいい例だと思います。新聞をどういう作り方をしましても、紙でば一と刷って目的地にもっていくのです。情報を受信する人のために情報の受信者のところに紙を届けてくれる。

これがデジタルの世界になってきますと変わって、情報を発信する側というのは電子的な媒体にしてしまえば、後はその情報を必要とする人がかかってにもっていつてくれる。ちよつと乱暴な言い方なんですけど、そういうことが可能になってきているわけです。

それがまさに今よく言われている、オンデマンドプリンティング、オンデマンド印刷ですね。我々にしてみると、必要な時に必要な内容のものを必要な部数印刷する。

このデジタルで印刷物を作るもう一つのメリットを考えてみますと、分散印刷というのがあります。例えば私がいろいろなところでお話をさせていただく。その時に去年までは、紙に印刷して私のこのスライドと同じものを皆さんに配るので、自分でコピーして持ってくるか、主催者の方にコピーしていただくかするわけです。それもファイルを持ってきて、この近くにある出力センターさんとかに行つて直接出力してもらうことが可能なわけです。そうすると100部とか200部という資料というものを持ち歩いたり、宅急便に頼んで送つたりとか、そういうことをしなくてすむわけです。それが電子的な媒体を利用するもう一つのメリットだと思うのです。

すでに、電子的な媒体を使うということはアメリカでは広く行われております。印刷会社さんがそれをやられています。RRドメリーという会社、アメリカの印刷会社さんです。過去数年の間に、電子出版を始めたことによつて

利益が3倍になった。

ということかという、今まで紙での印刷、紙での出版というのも減つてはいないわけです。その上にさらに電子出版というのが加わつたものですから一気にここまで伸びた。すでに大日本さんなどもそういう方向に向いてらつしやいます。もう大日本さんはCD-ROMの制作とかホームページの制作とか、今日お出でいただいている方々も多くの方がやられているようなのですが、すでに始められているわけです。

情報を加工するというのにかけては、皆様はプロなわけですから、媒体がどのようなものであつても、その媒体をよく知り尽くして、そこに情報を読みやすい形で乗せていただくというのが、これからの印刷になっていくのではないだろうかと思ひます。

いくつか媒体というのを挙げましたが、やはり紙というのは絶対に残ります。CD-ROMというのも最近増えてきました。今下手しますと本1冊作るとを考えたら、CD-ROMの中に、後で紹介します我々の技術を使ってファイルを入れていただいたほうが安いかもしれないのです。インターネット、イントラネット、こういったものが新しい媒体なのです。今私が皆さんに紙のことをお尋ねすれば、皆さんよくご存じだと思います。

それと同じようにお客さんが何か印刷物を作つて下さいと来た時にどうしますか。紙にしますか。CD-ROMにしますか。何にしますか。ホームページにのせますか。両方やりますか。そういうような提案が出来るのがこれから求められてくるのではないかと。

ここでまず最初の質問です。自分の自伝ですか、私のかわいかつたご幼少の頃の写真とか、いろいろなものを集めて12ページのB5版の冊子を作りたい。必要な部数100にしましょう。今日お出でいただいている方の中で、その12ページB5版カラーで、条件としては、私は印刷屋さん、原稿はどういうふうを持ってきてと言われればその通りに持ってきます。ワープロにしろと言われればワープロにしますし、写真と言われたら紙焼きでもボジでもネガでもなんでもします。デジタルにしろと言うのでしたらデジタルにします。そういう条件で12ページB5版100部のカラーのものを刷つてくださる方、手を挙げてみてください。

はい、お一人様。なぜ刷つていただけないのですかね。

〔回答者〕 今のお話で、どこまで品質が—— だと思わないのです。

〔鈴木〕 そうなんです。ある印刷屋さん、同じような質問をしましたところ出来ないと言われたのです。DTPでやればと言つたら、出来ない。なぜと言つたら、品質がと言われました。今まさに同じお答えだったのですが、品質がと言つても、どういう品質になるんだか教えてよと言うと、いや駄目。出来ないの一点張りなんです。Aカラーつて知つてるだろうという、知つてる。それでプリントしてくれてもいいよと言つたらば、そんなコピーセンターみたいなこと出来るかと。思はず言い返したのが、分かつた。じゃあ今度フジゼロックスさんに言

って、Aカラーと書いてある下に、印刷機と書いてもらう。

この前Aカラーの新しい広告を見ていたら、フルカラーコピー／プリンターと書いてありましたので、これで皆様晴れて使っていただけるかなと。ただコピーセンターみたいなことを出来るかと言われたのは、私ショックだったのです。と言いますのは、こういう集まりで何人かのお話を聞きますと、いやあ最近仕事やりにくくて、他業種の人間が印刷業界に入りこんできてやりにくくてしょうがない。そういう話を何回か聞いたことがあります。そこで私が思ったのが、正直に申しあげてしましますが、コピーセンターみたいなことが出来ないからやらない、だからコピーセンターみたいな所がそれをやってくれる。私が今言った100部のものを作りたい時に、皆さんのところに行つて駄目つて言われたら、コピーセンターライクの所に行かなくてはならない。それつて他業種が入ってきているのではなくて、ひょつとすると他業種の方にいらつしやい、いらつしやいされているのではないかなと。そういうふうには真剣に思つたことがあります。私未だにそういうふうには思っています。

なぜDTPというものを始められないのか。コンピューターを習わなくてはいけない。次がソフト、またこれがやつかいなんです。ソフトを習う。それ以前にどんなソフトを使つたらいいか自分で選ばなくてはいけない。次がいろいろな周辺装置を揃えなくてはいけない。ちょうどこのポストスクリプトの世界、DTPの世界というのは、オープンシステムと言われてます。オープンということは誰でもやれますよということ。誰でもということは、皆さんもそうですけれども、メーカーさんが誰でもそこに入つてこられます。ちょうど昔のステレオというのは一体型、今はあまりないのかもしれませんが、一週買つたらそれつきりというものが多かったのです。今はコンポーネントタイプ、スピーカーはなんとかとかアンプはなんとかとか。CDプレーヤーはどこがいい。好きなものを組み合わせ、自分に合ったものが作れる。まさにそれがオープンシステムなのです。

ただし印刷の世界で考えますと、周辺機器というのが全部同じメーカーさんから出ますから、あるAというメーカーさんから機械を買えば、あとはそこに何か足していきたい場合にはAという会社に頼めば完璧なものが用意出来る。もう一ついいことというのは、いろいろなメーカーではないので、なにか問題があつた時に、そのAの会社に言えば全部やってくれるのです。

制作の手法が若干異なる。そういうことがあるので、こういうものをいろいろとやらなくてはいけないので、大変だと思われている方多いと思います。実際にDTPを始められて大変だつたと思う方、手を挙げてみてください。導入の時でもいいです。

やはりいらつしやるんですね。私それに同意します。大変な部分というのは絶対にあります。楽しんで出来たら私もきつとお金持ちになつていたと思うのですが。そういうふうにはやはり苦勞するところはあると思うのです。ただその度合いというのはいろいろあると思います。

これがそういう理由で、DTPにいかれない。欧米ではDTPという言葉が死語になつていく。DTPの先というのが、電子出版、デジタルパブリッシングになつてい

るのですが、電子出版もすぐ出来ます。今デジタルの世界にまだ入られていない方は、ふたつステップを踏まなくてはならないわけです。一番大きなステップはDTPを始めること。その先電子出版に行く。それは階段の高さにしてみれば、つまりきもしないくらいの高さです。ただし最初のステップというのは、非常に高いと思います。

何を言わんとしているのかというと、今そのデジタルの世界に入らないと、電子出版の世界に行くのは大変です。というふうに申しあげているのです。

ユーザーさん側からみますとインターネットというのがありますから、割りとインターネットを使つた出版というものに感心が高いと思います。ユーザーさんというのは、そういう情報を持っている人です。情報を持っている人が今まではその情報を印刷屋さんを持っていてこれを加工してくださいといつていたのが、紙だけじゃないかな。電子的なメディアというものにも、非常に感心を示されている。

そうしますと、そういう情報を加工する制作側とそれを発信する人と、受信する人との間に、少し情報の形態という所でギャップがあるのではないかという気がします。ここでは電子的な出版というものをやつていただくのに、先程も話題になりましたアクロバットという技術があります。これがあつたから私としても自信を持って皆さんにDTPから電子出版に行くのはそれほど難しいことではないと言えるのです。

今俗にマックをやつている方、今やられているのと同じ機械で同じソフトで、スキヤナーもそのまま、プリンターもそのまま、アドビのアクロバットエクステンションというソフトを追加していただければあつたという間に電子出版が出来ます。ですから、今までやられていたのと同じ感覚で、紙じゃないところへ情報をのせることが出来るようになるわけです。体裁も全く紙と同じです。

そのやり方、なぜ簡単かと言いますと、DTPでやつていた場合には、素材の作成のというのがマックとかスキヤナーを買つてきて使われていた。色校するなり、文字校するなり、それでフィルム出して、それを印刷する。こういう手法をされていると思うのです。

それでアクロバットのなことをやる場合には、もちろん出力というところで、プリンターで出したり、フィルムで出してでもいいですし、CD-ROMにおとしたり、ホームページに掲載したりというのが、前段階です。我々よくフロントエンドと呼んでおりますけれども。前の制作段階というところでやることを変えずに、そのままアクロバットの形式にすることが出来るようになるわけです。これは電子的なファイルです。フロッピーにも入りますし、MOにもなんでも入ります。インターネットにものせられます。

例えば私でも、このDTPというのをを使って電子出版というのは簡単に出来る。先程の私の自信、紙に刷るのはやめた。誰もやつてくれないからやめた。それでページメーカーで作つて、私のホームページにのせておいて、いざとなつたらみんなに、俺のホームページ見てね。すごいよ。と言つておけば、見てくれるかもしれないし、見てくれないとは思つたのですが。そういうふうになると世界中の人が、紙だつたら今のところ、想定するのは日

本国内に限られた人を対象にした情報の流通なんです、インターネットというのを使えば、それが無限大に広がっていきます。

私がいろいろ好き勝手なことを申しあげましたが、まとめてみますと、いろいろ書いてありますが、私が言いたいことは一つだけなのです。この3番目、アクロバットを皆さんで使ってみましょう。アクロバットのファイルを見るためのものというのは、無償で配付しておりますので、是非それで遊んでいただきたいと思うのです。いろいろな情報というのが、アクロバット形式で流通しておりますので、それを見ていただきたいと思います。

ちなみにそのアクロバットっていったい何なんだ。ここで私が逆立ちするわけでもなくて、ちゃんとうちの製品ですので、それをちょっとご紹介したいと思います。

ここでご紹介している例というのが、まずアメリカ合衆国政府が、このPDFと言われるアクロバットが使うファイル形式を採用しました。国税局、アメリカ国民が大好きな国税局、要は税金を納めに行くところです。アメリカの場合にはこの税務署の書式というのがいろいろあります。ちょっとここで場所を移動しまして、こつちの機械にうつりたいと思います。

ちなみにこれがアドビの日本のホームページです。さつきつなげようと思ったら、このフォームというのが確か200種類くらいあるのです。ラスベガスで大金とった時に書き込まなくちゃいけない書式とか、いろいろあるのです。日本もいろいろありますが、アメリカの場合もそうなんです。それを今まで、アメリカ政府の国税局は、国民一人ひとりに送りつけていたわけです。その時の発送料というのが、一人当たりだいたい4ドルから5ドルかかる。それを今国税局がホームページ持っています。ホームページに自分で必要な書式を勝手にもっていつてくれ。そういうふうな形になっています。そこで全部、ポストスクリプトかPDFという形になっているのです。

その書式の一部をもってきました。それがこれなんです。これがPDF形式になっています。PDFのいいところ、相手がどんなアプリケーションを使って作ったかということ、全然気にしなくていいのです。どんな文字が入っているかということも気にしなくていい。

PDFというのは、ポストスクリプトの技術を使っていますので、今ご覧になっていたいただきますように、アウトラインフォントを使っています。こういうふうには拡大していても、画面上で非常にきれいに見えます。こういう書式を、要は納税者が24時間好きな時に、そのホームページにいつて持ってきて、自分のところのプリンターでプリントアウトして書き込んで送ればいいのです。

そうしますと政府にとってみれば、発送コストが一人あたり1セントもかからない。ホームページに1回のせてしまえば、それでおしまい。

もうひとつの例、新聞というふうには先程申しあげましたが、実際にアメリカでは、いくつもの新聞がネットの上でPDFで新聞を発行しています。それがここにあるのですが、ニューヨークタイムズ。購読者は、好きな時にいつてファイルも持ってきて、画面上で読めばいいわけです。もちろんアクロバットですから、このへん見て

みたいなと思った時には、拡大すれば非常にきれいにみえるわけです。

さらにすごいのは、この中は文字情報で入ってますので、この文字の部分をもってきて、カットアンドペースで使うことが出来るのです。

最後にひとつ、今日作ったばかり、ホヤホヤのサンプルをご覧いただきたいと思うのですが、印刷の世界さんのホームページに入ります。そうしますと今日のイベントのことがホームページに掲載されていて、これですね。

こちらのほうにオンラインマガジンというのがあります。要はデジタル的に作られた雑誌の部屋があるのです。今皆さんのほうにはお配りしていると思いますが、プリントアウトして、それをコピーしたものをお配りしております。もとはAカラー、ポストスプリクトのニップ付きだと思えますが、これはさつき撮っていただいた写真なのです。あと原稿をちょっと書いていただきまして、速報版を作りました。もとはページメーカーで作られていて、今使っているのはネットスケープナビゲーターという、インターネットを見るためのソフトなんです、その中でアクロバットリーダーというのが動いているのです。ですから相手がPDFだと自動的にアクロバットが立ち上がるようになっているのです。

今日200部コピーしていただいたのですが、そのコピーの時間とかを考えてみると、このファイルが作られた時にすぐインターネットにのせてしまえば、インターネットにアクセスしている人のほうが早く見られるのです。

まさに今皆さんの手元にお持ちになっているものが、こういうふうにはネットの上のついで、今世界どこにいてもこの情報にアクセスすることが出来ます。それでアクロバットリーダーを見て、紙と同じ。大事なものは紙と同じ体裁だということです。

これがPDFと呼ばれるファイル形式でして、アクロバットが採用しているファイル形式です。

なんとなく話が、あつちいつたり、こつちいつたりしたような気がしないでもないのですが、いずれにしてもデジタルの印刷物、デジタルで作られた印刷物、デジタルで配付される情報というものは、これから間違いなく増えますし、今までこういった形で情報を発信出来なかった人でも、デジタルならば出来てしまうのです。そういうふうには世の中というのは変わってきていますので、やはりそういうものにも皆様の方でお勉強いただいて、いつでも対応出来るように、いつでもお客様に対して紙以外の媒体の提案も出来るようになっていただければいいのではないかと思います。

本日は長い時間をいただきまして、本当にありがとうございました。



情報ネットワーク推進委員活動状況

平成9年4月末まで

日付	開催会名	講師名(敬称略)	演題
平成8年 2/3	沖縄県印刷若潮会	井上 雅 博	マッキントッシュを使ったインターネットの紹介 および電子出版の流れ
5/25	山形印刷研修会 (全国総会)	7 人 全 員	パネルディスカッション
6/1	鹿児島県印刷工業組合 青年部	間 直 樹	わが社の経営理念
6/22	神奈川正和会	井上 雅 博	近未来印刷はインターネットからはじまる
7/19	名古屋而立会 ぎふ印刷翠陽クラブ 金沢青年印刷人クラブ	白 井 慶 吾	価格破壊と営業のデジタル化
10/9	金沢青年印刷人	岡 田 吉 生	名古屋而立会の歩み マルチメディアの現在
10/19	やまなし印刷若人会 (全国大会)	岡 田 吉 生 白 井 慶 吾 井 上 雅 博	デジタル塾
11/15	大 阪	岡 田 吉 生	成功例は失敗のもと 酸っぱいはセイコウのあと
平成9年 3/19	茨城印刷緑友会	岡 田 吉 生	マルチメディアで大切なのは機嫌の良いことです

平成8年度 第2回グループ長会議

平成8年10月20日
甲府市 常盤ホテル

1. 会長挨拶

タイムスケジュールについて(別紙)

2. 山梨大会報告(依田氏)

33グループ、275名登録のお礼があった。

改選期であることや財政状況等の課題もあり、グループ長会議を総会の前に設定し、協議事項の審議に充てることにした。その後の総会での決定を受けて、翌朝、新体制での第1回グループ長会議を開くことにした。

3. 神戸復興支援セミナー準備状況(井下氏・島氏)

阪神大震災被災高校生支援「くすのき基金」に寄付する剰余金を600,000円の目標としているので、登録料を15,000円とした。

期日：平成9年2月8日(土)

会場：神戸市産業振興センター

第1講 講師：木村義秀氏
神戸市マルチメディア推進室

第2講 講師：田中和宏氏
アドビシステムズジャパン

登録用紙は各グループ宛に発送済みだが、受験シーズンのため早めの登録をお願いする。

登録人員は250名規模を想定している。

担当分担任は式典・セミナーを大阪、懇親会は神戸としている。

宿泊先は懇親会会場でもある、神戸ハーバーランドニューオータニを予定。

5. 東京大会準備状況(芝崎氏)

日時：平成9年8月2日(土) 午後5時～8時30分

会場：ホテル日航東京

テーマ 「変わろうよ…緑友」

登録料 23,000円

(同伴者15,000円 中学生以下無料)

人員規模 500名を想定

宿泊 15,000円(レインボー側は17,000円)

他のホテルも設定予定あり

式典と懇親会の併行スタイルを考えている。

6. 次期会長推薦について

会長より次期会長に、佐賀県印刷人若潮会の松浦氏の推薦があり、了承された。

(正式決定は長野総会にて)

松浦氏より、「緑友はやっばりたのしく」という挨拶があった。

4. 長野総会準備状況(竹内氏)

7. 周年行事等

平成9年5月23日(金)
長野青年印刷人緑友会 40周年
平成9年9月13日(土)・14日(日)
九州・山口青年印刷人鹿児島大会
平成8年11月30日(土)
全青協

8. 各担当常任幹事より

会計 入金状況報告(別紙)
広報 フレンズ・オブ・グリーン発行予定について
名簿 訂正記入用紙を発送するので、今年中に返送願いたい。

9. その他

総会、大会、セミナーの各行事の開催決定についての質問があり、利根川直前会長よりグループ長会議での立候補もあれば逆に各グループに打診して決定される場合もあるとの説明があった。

現状予定

8年度セミナー	神戸(大阪青年印刷人クラブ・神戸印刷若人会)
9年度総会	長野(長野青年印刷人緑友会)
9年度大会	東京(在京9グループ)
9年度セミナー	未定
10年度総会	未定
10年度大会	鹿児島(黎明さつま)
10年度セミナー	未定

今後、各行事の立候補時期などをルール化していくことにした。

平成8年度 第3回常任幹事会

平成9年3月22日
浅虫温泉 椿館

1. 会長挨拶

⑤懇親会 18:30～20:10
⑥ラスト 網領唱和を最後に行う 20:10～20:30

2. 山梨大会報告(依田氏・井上氏)

Mac 30台の搬入設置やソフトのインストール、インターネット接続等、前日の夜遅くまでかかり、不安もあったが、270名の参加を得て、盛大に行えた事に感謝すると共に、自グループの活性化にもつながった、と報告があった。

又、別紙により会計報告があった。

3. 第30回神戸復興支援セミナー報告(岸氏・井下氏)

情報インフラにおける行政の動きやアクロバットに代表される通信環境をテーマにセミナー2講を行ったが、登録数253名と当初目標が達成できた。

会計報告(別紙)では義援金計700,000円の報告があった。神戸・大阪は以前より交流があったが、初めてジョイント行事を行ってみて、近くにありながら各々の性格の差があり、お互いにとって刺激になって良かったと思っている。

4. 第40回長野総会準備状況について(竹内氏)

グループ長会議・総会・翌日の早朝会議等のタイムスケジュールの概略説明について協議した。

登録料では宿泊無しの場合と同伴者について検討してもらうことにした。

網領唱和は、沖縄県印刷若潮会・外間氏と決定した。

5. 次期総会開催地について

平成10年度予定行事が、鹿児島大会・名古屋セミナーとなっているので、地域バランスから、青森県印刷青年経営者会議と決定した。

6. 40周年東京大会準備状況について(芝崎氏)

日時 平成9年8月2日(土) 14:00～20:30

タイムスケジュールを一部変更した。登録申込書等は4月中旬頃各グループへ発送予定。

①グループ長・常任幹事会議	13:00～15:00
②登録受付開始	14:00～
③記念講演 塚田益男氏(全印工連前会長)	15:30～17:00
④記念式典 30周年時以降の歴代会長表彰含む	17:30～18:30

登録数を500名と想定し、宿泊先をホテル日航300名、他ホテル200名を仮押えている。

7. 第31回仙台セミナーについて(江馬氏)

日程 平成10年1月31日(土)

会場 仙台駅近くのメルパルクを予定している。

登録料・内容等は検討中だが、企画案を次回会議に諮りたいと思っている。

8. 平成8年度仮決算報告

会計幹事欠席のため、会長から報告があった。(別紙)

3グループの未収金があるが、これが解決できればという条件付きではあるが、次期繰越予定の中から長野総会補助金を除いた残りを緑友基金へ繰入れる事にした。

又、各グループからの入金の際に、振込手数料を差引いたグループが若干あったが、振込手数料は各グループの負担とすることを再確認した。

9. 会長提案アンケートについて

会費問題他会長提案アンケート案(別紙)について協議した。

①総会までにアンケートを各グループに発送する
②集計結果を各常任幹事に連絡する
③結果により検討する

10. 周年行事等について

①長野青年印刷人緑友会 40周年
5月23日(金)
②東北青年印刷人連絡協議会
6月28日(土) 於 青森
③九州・山口青年印刷人 鹿児島大会
9月13日(土)・14日(日)
④大阪青年印刷人クラブ
9月6日(土)有馬 Top セミナー

11. 次期常任幹事について

次期会長予定者 松浦氏より、次期常任幹事案の発表があった。

F of G ネットワーク

仙台刷新会 高速美術印刷㈱ 江馬 康雄

あるアンケートで、県外の人に宮城県の感想を聞くと「東京から2時間と近く、町の規模も大きく、自然にも非常に近く、ビジネス、私生活共非常に住みやすい町です。」ところが県内の人に同じ質問をすると「何もない町だ。観光物産も少なく活性化してない町だ。ワールドカップサッカーだブランメル仙台（JFLのサッカーチーム）だと言ってもさっぱり盛り上がらないじゃない。」と非常に悲観的です。

さて我が仙台刷新会では宮城県警に協力してピンクチラシ回収キャンペーンを、行っています。その中である人が私に向かって「印刷屋さんってこんなことやったって結局この印刷物も印刷して、儲かっているのでしょうか？」と言われ非常にショックでした。「あー私たち印刷業は、DTPだマッキントッシュだ、と最先端技術を駆使しながら、我々の生き残る道と言いながら、儲けることを一生懸命探してるけど、世間からそんな風にしかみられていないのかな？」と感じました。

我々は、印刷業が情報加工産業だと言われ続けておりますが、印刷であり、場合によっては日本の文化というものを、考えた場合、作る文化も大切なのですが、守る文化、参加する文化双方を考えたいと、自分の商売であり、自分の人生を、考えて生きたいと、感じました。

さて私ごとですが、こんど全国印刷緑友会の総務の大役を長尾会長、松浦次期会長候補

からお願いされ、引き受けることにしました。

緑友会とは所属団体数44グループ会員数1200名の団体で、この1200名の仲間の人たちと、いろんなかたちでいろんな場所で、たくさんの方々が出来るのが楽しみで私は行っています。私は東北の仙台で商売をしていますが、初めて緑友会に出席した時同じ印刷業の商人なのに考え方価値観何をとっても私とはずいぶんと違うことに驚かされたものです。この様なことを感じた人はたくさんいるのではないのでしょうか。

ひとの価値観とは、わからないもので自分の知らない価値観にふれた時の驚きというのが私は大好きで、これがビジネス、プライベート、いずれにしても北は北海道、南は沖縄まで全国1200名の人たちと仲間になっていろんな価値観を印刷業という同じ土俵の上で共有できることの、すばらしさ、は緑友会でなければできないと確信します。私は、たぶん緑友会始まって以来の若い役員だと思いますが、だから緑友会は良いんだと思っております。だから緑友会は良いんだと思っております。がんばりますので今後ともよろしくお願ひします。

次号の担当は

棚橋 泰仁さん(名古屋而立会)
関キングコーポレーション
名古屋市中区丸の内3丁目7-23
TEL 052-961-7661
FAX 052-961-7662